
IS インフィニット・ストラatos IS学園の笑う偽者

ZEOLU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラatos IS学園の笑う偽者

【著者名】

NEO-LU

【あらすじ】

これは、『インフィニット・ストラatos』に閉じ込められた転生者モドキが自分の記憶を探しながら世界観を崩壊させていくお話。結構無謀な作品です。

第0話 それは例え話（前書き）

就職活動の逃げからはじめてしました。

俺オワタ。

だが後悔しない。

俺はアホだから。

ということです、中一くさこの話をどうぞ。

第0話 それは例え話

2011年の冬。

一向に発売されない『インフィニット・ストラトス』の8巻に一次創作者は焦りを見せていた。

そこで彼らは一つの計画を立てた。

インフィニット・ストラトスの世界観に転生者を放り込んで自分が好みの展開に書き換えてしまえば、暇な時間を消せるだろうと。そもそもその考えがいけなかつたのかもしれない。

彼らは『インフィニット・ストラトス』という“世界観”に一つの『種』をまいた。

『種』は登場人物たちの設定を少しずつ集め、大きくなつていき、彼ら好みに世界を書き換え始めた。

そこで異変が起きた。

『種』が集めた設定の中に『転生者』と呼ばれる異物が混入。『種』は世界観に合わない能力で“世界観”を滅ぼし始めた。

著作権侵害という最悪な結末を予想した彼らは『種』を創作者としての権限で一部を碎き、『種』を制御していた力を“世界観”といつ牢獄に閉じ込めた。

しかしして彼らは著作権侵害で訴えられることは阻止された。

その頃、『種』は集めすぎた設定のせいで、彼らの意向とは関係のない自我が芽生え始めていた。『種』は架空の人物だが、確実に

生きていた。

これは『例え話』

だからも褒められない……

『例え話』

第0話 それは例え話（後書き）

ご感想はお待ちしております。
こんなで大丈夫なのだろうか。

第1話 そいつは転生者（前書き）

結構投稿のペースは雑になります。

一応完結はさせむつもりですが、長くなります。

第1話 そいつは転生者

夜、全てが寝静まつた静寂な時間。

「…………」

「噂は本当なのでしょうか……」

私、織斑千冬と山田真耶は、最近目撃されたといつ謎の人物の噂を追つて学園敷地内を探索していた。

「生徒が言うには……お化け……だそうで」

「山田君、あまり噂を気にするものではない」

「そ、そうですね……お化けなんて」

「まつたく……明日は一夏達が入学する日だといつ何をやつているのだろうか我々は」

「そつは言つても、生徒の不安を取り除くのも私達教師の務めですよ、織斑先生」

「…………すまない。さつきのは失言だった」

私達は学園の周囲をさらに探索する。すると、少し霧が濃くなってきた。

「霧……濃くなつてきましたね」

「そうだな 待て、これは霧じやない、水蒸気だ！！」

「え、といつことは近くに人が？」

暗闇の向こうにぼんやりと明かりが見えた。それを見た山田君の顔が青くなる。

「あ、あわわわわわ

「落ち着け山田君！－！」

私は山田君を後ろに下がらせ、その明かりへと向かっていく。

ギャア、ギャア－－

「ひやああああああ－－」

「落ち着け山田君、いまのはカラスの鳴き声だ－－」

「だつて……織斑先生エ……」

「」

「」

どこからか鼻歌が響き始めた。

この曲は……ゲゲゲの鬼太郎？ しかもこのリズムは4期……つまり90年版。

「お化け……お化けが墓場で運動会ですよ－－－」

「だから落ち着け、意味が分からんぞ－－！」

私たちはそちらに近づいて行く。そこにはチョウチンに『おでん』と書かれた屋台があった。

「…………屋台?」「

そして、のれんで顔が隠れた店主らしき人物を確認した。

「おんや～、お密さんかいな？ 今日はてっきりだれも来ないから自分で調理して自分で食べようと思ってたんだけど……来たなら拒みはしないけど、あんまり種類は無いよ？」

私は店主に話しかける。

「それよりも、このIIS学園の敷地内で勝手に屋台を経営されてしま困る。侵入者を許したとなると国際IIS委員会や各国家から苦情が」

「ちよい待ち

すると、店主は右手で私を静止した。

「IIS委員会は存在する?」

「…………どういふことだ?」

「実際、一夏がIISを動かすようになつて、使者を送ってきたか？」

？」

「…………なぜ一夏のことを知つていい？ それにあるで国際IIS委員会が実体の無い組織のように。」

「いや、ちゃんと存在するならいい。まったく……イズル氏もその部分を描写すれば数ページ埋まるのに……勿体ない……ぶつぶつ」

「……いつはさつきから何を言つてゐるのだ？ あまり意味が理解で

きないので、考えるのはやめた。

「立ち話もなんだし、お一人さん席に座りなよ」

「おい、いい加減に」

「ビールもある。料金はいらねえ」

「『馳走になろう』、山田君」

「ええ！？ 織斑先生！？」

タダ飯を食わせてくれるとは『』店じゃないか。
とりあえず、山田君と一緒に屋台の席に座った。

「チヨウチンにはおでんと書いてあるけど、今日のメニューは趣
向を変えて」

鍋の中で白っぽい何かが煮えていた。

一体なんだろ？

これは……二つ匂い？

「 水餃子だ」

なるほど、水餃子か。日本では焼き餃子が主流だが、本場では水餃子が基本だと聞いたことがある。これがまた酒の肴に良く合つてうまかつたりする。昔一夏が作ってくれたのも美味かつたが、さて……この屋台の作る水餃子というのはどれほどの味 ん、どうした山田君。そんなにぽかーんとした表情を見せて……出来れば醤油と酢とラー油を取つて欲しいのだが。

「織斑先生……」の店主の姿が……」

「む？」

私は割り箸を割りながらその店主を見た。

パキンッ！

「……ツー？」

黒いスーツに猫の足跡がプリントされたエプロン。少し優しそうにも見えるが、凛とした目つき。

黒髪の短髪。

腰に装着されたポーチと出席簿。あと菜箸。

「山田君、ここに鏡があるのか？」

「そもそも織斑先生は座つていて、立つている姿が鏡に見える訳ないですよ……」

「だよね～」

店主の声にも聞き覚えがある。

「初めてまして、俺の名前は……いや、名前は後々面倒になるからニックネームだけ言うわ。俺の名前は『ドッペルゲンガー』だ。気軽に『ドッペル』って呼んでね」

「…………」

「お化けええええええええええええええ！」

山田君がそうなるのも無理はない。

そこには『私』がいたのだから。

転生者

【？？？】

転生者

【？？？】

本作の主人公。『ヒロイン』。愛称は『ドッペル』。

本名不明、目的不明の転生者。

実は無くしたものを探すような行動が目撃されてしまっているが、真相は分からぬ。

屋台で一週間粘つて、原作キャラがやつてくるのをずっと待っていた努力家。

数分後。

私と山田君は水餃子を食べていた。（「飯もついてきた。もちろんサービスで）

「……おいしい？」

「色々と聞きたいが……」これが美味しいのは確かだ
「ええ……おいしいです、本当に。どうやつたらこんな味が出る
んですか？」

「そりやあんた……企業秘密だよ」

そう言つてドッペルは鍋の中の餃子を菜箸でかき回し始めた。

「もうこや俺……ちょっとこちら学園でお仕事を臨海学校までの短
い間、やるこことになった」

仕事？

「仕事とは……なんだ？」

「ん~、仕事と言つか……なんかうまく思い出せないけど、俺は
その時間まで何かを探さなきゃいけないって気がするんだ。部屋は
ちよつと~をじりつて部屋増やした」

「――この間に」

「つことによろしく、えつと……何て呼べばいい?」

「千冬で良いだろ?。お前は私の教え子ではないからな」

「私は真耶です。よろしくお願ひします」

こうして、謎の人物『ドッペルゲンガー』との出会いとなり、

私の災難は始まった。

続く。

第1話 もう一つは転生者（後書き）

「感想おまかしてあります。

体験版はここまでです。

これからペースダウン……あるいはまだ早いですが、ゆっくりです
ので」「了承ください。

第2話 ドッペル干冬、襲来。（前書き）

今回でドッペルがどんなテンションなのかを紹介する話です。

第2話 ドッペル干冬、襲来。

「全員揃つてますねー。それじゃあヒカルはじめますよー」

みんなで存じ山田先生による血口紹介のシーン。

山田先生は大人なのにすごく幼く……いや、凄いところほどではないが、同世代のように見られるであらう。ちなみにナレーターしてる私は誰かって? そりや……あなた、まだ秘密つて奴ですよ

「それでは監修さん、一年間よろしくお願ひしますね

「……」

「ここの原作通りで誰も返事をしない。
まあ、妙な空気だし仕方ないよね?」

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号で

おいで、これでいいのか副担任。せめてもうひとつ喋ること
くらいはあるだろ?」……。さて、そもそも一夏君の視線に移る。

一夏 side

「織斑一夏くんつ

「は、はい!?」

「さなり呼ばれて声が思わず裏返ってしまった。案の定、くすく

すと笑いを　これじゃあ落ち着かねエ。

?長い、省略!!

「ちよ、もうちょっと力入れろよ!!　って、誰に叫んでんだ、

俺

「お、織斑くん……?」

ザザ　ザザザアアアー!!

>>早送り

パーンッ!!

「いつ　　!?

俺はこの叩き方に覚えがあった。

おそるおそる振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、良く鍛えられているが過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせるような鋭い吊り目。

「げえつ、関羽！？」

「うーん、39点だな。赤点」

へ？

すると、千冬姉は俺の頭を撫でた。

「久しぶりだな、一夏」

「千冬姉　じゃなくて、何でここに」

「待て、次は真耶の台詞だ。後輩が先輩の台詞を削っちゃいけないな

「す、すいません（地声）」

な、なぜか謝らなければいけない気がしたのはなんでだろ？

「えっと、あの……」

「真耶、俺が渡した台本の21ページ目だ。やつやのおどおどした演技は最高だつたぞ？」

「ほ、本当ですか！？」

あのおどおどしたのは演技だったの！？

「ええ……では、あ、織斑先生。もう会議は終わったんですか？
というか織斑先生ですか？ さつきはノリで流してましたけど」

「なんだよ、折角いい流れなのに」

「やっぱりあなただつたんですね……はあ……」

なんだか生徒を置いてきぼりにして変な話が始まつたぞ！？ い
いのか、これで。

「とにかく……」「ホン。諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で殺戮マシーンか正義の味方と言う微妙な紙一重でバランスがとられた選択肢しか選べないよう魔改造するのが俺　いや、私の仕事だ！！」断言してもいい

「正義の味方はともかく、殺戮マシーンは駄目ですって……」

あれは俺の知っている千冬姉……いや、織斑千冬という生物だろうか。

「キヤーーー！　千冬様！　本物の千冬様よー…」「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導していただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

きやいきやいと騒ぐ女子生徒の前でニヤリとする千冬姉（仮）。

「ならば……一夏、ちょっと席をどけろ」

「へ？」

千冬姉は俺の机の教科書などを入れるスペースからサイン色紙を取り出した。つて、いつの間に。

「いまからサイン会を始めよう。全員で私を称えよーーー！」

「」「「チ・フ・ユー！　チ・フ・ユー！」（以下、繰り返し）」「

」

「高ぶる……高ぶるぞー！　私は今……猛烈に感動している」

「あの……痔のお薬のCMですか？」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないによつに嬌をして～！」

おい、文章的に今のはどう考へてもおかしいだろ！―― いつたい何だ、この学園は…… 何かの洗脳電波でも流れているのか！？

「ふは、ふはははははは！-！」

「ぬん！」

ガシヤアアアン……。

すると、そこには千冬姉が何かを蹴ったようなポーズで佇んでおり、なぜか教室のガラスが割っていた。

「まったく馬鹿共が……それにしても会議を延長させるほどの権力があいつにあるとはな、アイツは本当に何者だ?」

とりあえず俺は話しかけてみた。

「えつと……千冬姉？」

パンツ！！

「？」

「織斑先生だ、馬鹿者」

いきなり俺が知っているいつもの千冬姉へと雰囲気が変わった。

本当に何が何だか訳分かんねえよ。いつして波乱のSHRが終わるのであった。

一夏 side end

ドッペル side

俺はガラスの破片と共に草木へと落ちていた。

「アツオウ……見てママ、おせんべいになつやつた
ハハツハー！」

俺は両足のみを使って立ち上がる。常人にはちょっと難しい技だ。周囲には人はおらず、太陽の光がさんさんと降り注いでいる。日光浴には最高の一 日だ。

「ふあ～……そういうや、あんまし寝てなかつたな……。餃子の新しい具の構想してたから

俺は近くにあつたベンチに座り、サンドイッチを頬張る。中身はツナマヨと卵の一種類だ。まるでヤギが草をむさぼるよつて食べていく。

「……チーズ&レタスも作つとくべきだったな」

そこで俺はあることに気付いた。そう、飲み物が無いのだ！！
どうしよう……水もいいが、こいついうときはジュースかお茶が最適
だ。せっそく探しに行こう。

キーンゴーンカーンゴーン！！

ちょうど休み時間。買い物には十分のタイミングだ。この顔ならば大体の無茶は通る。そうと決まれば行動あるのみ！！俺は駆け出し 転んだ。

「アブシッ！？」

その頃。

「…………？」

篠ノ之箒は恐怖した。

偶然外を眺めていたら、そこには織斑千冬がいたのだから。そして教壇には織斑千冬がいる。箒はその事実に困惑しながらも、胸の内に秘めておくことにした。

視点は戻る。
廊下にて。

偽千冬ことこの俺ドッグペルは、飲み物を購入して弁当箱を持つて立ち食いの姿勢をしていた。ちなみに、あのサンドイッチは軽食だ。朝食はこれから。中身は鳥の唐揚げ、卵焼き、サラダ（ワンポイント）トマトマヨネーズ、ご飯は梅干しのシンプルな弁当である。

「いつただつきまーす」

俺が食べようとしたら、真耶がやつてきた。

「えつと……ジーベルさんですよね？ 何やつてるんですか？」
「何つて……スタイリッシュ立食い。またはスタイリッシュ早弁？」

「スタイリッシュは基本なんですね……」
「まあね、はい、あ～ん」「え、あの……」「え、あ～ん」「あ～ん」「あ、あ～ん」

真耶は唐揚げを食べた。

俺と真耶は一緒に弁当を

「そうじやないです！」「え、なんか間違つてた？」
「間違いだらけです！！ そもそもあなたが学園内にいるときやこしくなるのでやめてくださいーー！」
「およよ……ひどいわ真耶ちゃん」「さざぐれ

カシャン。

周囲が暗くなり、俺にスポットライトが当たる。そしてヴァイオリンで悲しい音楽がながれ始めた。

「みんな聞いて、真耶ちゃんが……仕事疲れでいらだち始めている。誰か真耶を抱きしめたりなどして昔のように誰かに甘えていたころのピュアなハートを取り戻してあげて……」

「ちょー!?」

「山田先生！…」

「真耶先生！…」

「やまちゃん！…」

「やまやー！…」

ぞくぞくと真耶に人が集まってきた。手にはお菓子やらジュースやら肩たたき券まである。みんな初日なのに随分と団結力が高いな……真耶の性格のなせる業だろう。

そして生徒の誰かが新聞紙で出来たオスカー像とマイクを俺に渡した。そして俺はそのオスカー像を抱きかかえながら生徒たちに向かつて叫んだ。

「ありがとうございます。この賞はみんなのおかげよー！ 今私は……最高に幸せです」

パチパチパチ！！

拍手喝采。

どこからかファンファーレのようなメロディが聞こえ、俺は生徒

たちに投げキッスをしながら教室へと移動した。

教室にて。

「ちよつと、よろしく？」

「へ？」

なんだあの金髪ドリルロールダブルツインマークツーセカンド・バージョンツーカスタムエディション改は。まあ、何者かは大体知つているんだけどね。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ、訊いてるけど……どうこう用件だ？」

「うん、俺も気になる」

「織斑先生！？」

「千冬姉！？」

「なんだ？ 僕に聞かれたらマズイ話しなのか？ 心配するな、闇金業者や悪徳弁護士くらいだったらこの俺、日本が生んだ人間國宝……アメリカ文化に浸ったジャパニーズゲイシャガールであるこの織斑千冬が解決してやろう（ドヤツ）」

「アメリカ文化に浸ったジャパニーズゲイシャガールって……色々矛盾してないか？」

「あの……わたくしは置いてきぼりですの？」

セシリア・オルコットは少し戸惑つ。

「だまらひしゃい、懸弟と金髪（弟等遺伝子の意味を込めて）の
クロワッサン！お前らの進級はこの私の手の中にある。つまり
はお前らの発言じだいでは学園生活で一生を終えやせぬ」とも可能
だ」「

「うわっ、やる」と汚い

ペルシピード

「おつと……栄養補給の時間だ。胸の谷間からソジョイを

千尋奴!!! 人前で胸を見せなしてくれ!!!

第三回

俺は胸をはだけるポーズを止めた。

「元気なだけだよ。」

「継承先生、い、いたしと、ひいたしの、のですか!?」

俺は出しあげたソジョイを再び谷間へと戻した。

叫ぶセシリアと一夏。

ガシツ
!!

俺の方を誰かが掴んだ。
おれはギギギと頭を向けた。

「私の尊敬する織斑先生に……変なイメージを植え付けないでください……」

「どうした真耶、そんな『少し頭冷やそうか』の表情をして……待て、なぜ引っ張る？」

ズザザザザザザザザ。

「うふふふふ

「どうした真耶、俺の部屋はそっちには無いぞ？ それにしても良かつたじゃないか、バレンタインでもないのにたくさん贈り物貰つて

「

ピシヤンッ！

教室の扉は閉められた。

ドッペルslide end

「なんだつたんだ？」

「さあ、わたくしにもわかりませんわ」

「ところで……あんた誰だ？」

「わたくしを知らない？」このセシリ亞・オルコットを

？以下、テンプレ。

屋上にて。

「……まだ怒ってる？」

「怒ってます」

山田真耶は頬を膨らましながら抗議の意思を見せていた。風が両者の髪をなびかせる。

と、そこへ織斑千冬がやつてきた。

「何をやつているんだ？ 授業が終わつたので来てみたら

「ちよつとお茶田したら真耶がすねちゃつて……」

「お茶田で名誉棄損なんて信じられません」

三人は手すりによりかかる。まるで仲の良い三人の青春の1ページのようにも見える。

「ドジペル、あまり山田君をいじめるな」

「了解。それで……例のクラス対抗戦の話はどうなつた？ 一夏

とセシリ亞の決闘になるに2000ペリカ賭けるぜ」

「ペリカという単位は知らんが、お前の予想で合つている。とい

うかなぜクラス対抗戦のことを知つてゐる?」

「そりや秘密だ」

すると、千冬がドッペルの田の前まで迫つた。

「まさかとは思つが……横槍を入れる氣ではないだらうな?」

「わすが千冬だ、そのまさかのマサカリ坦いだ金太郎飴が今なら
10%ポイント還元だ」

ガニツ――

「――!? 痛いな、これ以上美人になつたらどうするんだ!」

「安心しろ、これ以上美人にはならん」

「それ……千冬が言つておかしいと思わない?」

ドッペルの顔は織斑千冬。

織斑千冬は織斑千冬。

「……忘れてくれ」

「とにかく真耶、一夏の部屋に引っ越し蕎麦持つていきたいんだ
けど、部屋番号知つてる?」

急に話を振られたので戸惑つ真耶。

「えつと……1025号室だつたと思ひます。まだ本人には伝え
てはいませんが」

「よし、今日は麺を粉から作るぜ」

「私にもくれ」

「あ、私も食べたいです」

「はいはい」

ひつして過ぎていく一日。しかし、まだ終わらない。
戦えドジペル、負けるなドジペル、抜けた記憶と探し物の正体を
掴むまで。

次回に続きます。

第2話 ドッペル干冬、襲来。（後書き）

「」感想や「」意見をお待ちしております。
核心に関する質問は余裕で答えますが、他の読者へ見られてしまつ
ので、そこは考慮してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9636y/>

IS インフィニット・ストラatos IS学園の笑う偽者

2011年11月29日21時48分発行